

エリザベス・カーター書簡集(翻訳と解題)

大久保友博

はじめに

本稿は、18世紀英国で「青鞥派」として活躍した文筆家のエリザベス・カーター(Elizabeth Carter, 1717-1806)が、同じサークルのキャサリン・トールボット(Catherine Talbot, 1721-1770)らと交わした翻訳に関する意見交換の手紙に注目した上で、近代英国における女性の文芸文化を伝える重要な文献として本邦初訳を試み、英文学および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成は、まず日本語訳を掲げ、そのち解題として、底本テキストの検討、著者・内容・背景についての解説を記述する。

〔日本語訳〕

書簡① トールボット嬢からカーター女史へ 1747年2月9日 カズドン[L]

親愛なるカーター嬢、この手紙がこのお気に入りの地から送る数ヶ月間で最後の手紙になるかと存じます。二日後にはロンドンに発ちますが、そちらの退屈な場所では五匹のネズミの有名かつ愉快なお話〔日常性の高い童謡のひとつ〕以上にあなたの楽しめる普通の世間話なんてないでしょうから、〔ロンドンの〕ピカデリーからあわててするよりも、むしろここから余裕をもってお手紙をあなたに送ることに致しました。とはいえ、あなたが書き送る価値ありとお考えになるのなら、ロンドンからの手紙もお受け取りになることでしょう。さて手紙と言え、この冬の私にとってたいへんな楽しみであったものを、あなたがまだ逃していらっしやることについて、私は心からご愁傷申し上げねばなりません。と言いますのも、原典でプリニウスを理解したところで、大いに楽しんで読んでゆける実に格調あって優雅なその書簡の〔ウィリアム・メルモスによる〕翻訳に比べれば、とうてい適わないのですから。なるほど、忠実で上品な翻訳者というのは、文芸の共和国において高い徳を有する人物なのですね。つまりは世のための人であり、見栄を張ることなどけしてなく、学のない人に対して心から尽くす。そしてわれらの祖国を愛し、価値ある本でその言葉を豊かにして見せる。どの国の美しさも正当に評価し、値する外国人がいればその美しさに誠実かつ公正な光を当てる。原文には必要のない慎重

さや判断力・正確性といったものを有し、著者の名声をうらやむことのない謙虚さもある程度持ち合わせている。しかし、そういった英雄女傑というのは本当に少ないのです！ そこいらにいる翻訳者どもなど、ただの人殺しですよ。

[…]

書簡② カーター女史からトールボット嬢へ 1747年3月20日 カンタベリ[L]

おはようございます、親愛なるトールボット嬢。あなたの夢に失礼しますね。と言いますのも、私の持てる唯一の余暇が人々の寝静まる時間なのです。そろそろ道ばたで戸惑うこともなく、ロンドンに慣れ落ちていらっしやることと存じます。[…]

プリニウスが英語という衣で見目良く現れていることを、私はとても嬉しく思います。と言いますのも、彼は私のお気に入りの作家のひとりだからです。その書簡の翻訳は、きつとたいへんな難事であったに違いありません。[…]

喜んで、ロンドンからのお手紙というあなたのお約束の履行をお求め致します。晴れた日には無性にディールで朝の散歩をしたくなりますけれども、私はきつとここにおります。ここで散歩は、望遠鏡を使つてのぞきでもしない限り、とてもできたものではありません。では、ごきげんよう。

書簡③ カーター女史からトールボット嬢へ 1749年6月20日 ディール[L]

親愛なるトールボット嬢、私があなたに何かしらお送りする前に、逃げ出してしまうか、エピクテートを全部訳してしまうかのどちらかだ、というのが先日のご判断でしたね。ああ！ 同封された断片からはきつと、私がいかに怠け者かがおわかりでしょう。ですが私はこのところ具合が悪く、この頃は〔継〕母が立て続けにやってきては、他の時季に向けて働くのです。母は三時頃には始めて、日没までひとつの椅子に引付いたまま。とはいえ、始終何かをし続けるのは私には望めないのです。もう自分は動く力さえなくなってしまったのだと考えるほかなくて、寝たきりの気分です。[…]

同日付[M]

同封致しました翻訳に私は本当に我慢ならないのです。と言いますのも、私にはそれ意味あるものにも言語にも見えないものですから。ただただ、少なくともあなたが私にお求めになるものをやらずにすませられる証拠というよりは、単に私がほんやりとして拙い英語しか書けないという証しをあなたに送ってしまいました。

書簡④ トールボット嬢からカーター女史へ 日付不明[M]

思い切つてあなたの翻訳をおふたつお返ししますが、信頼してお委ねしますので、同封してお送りします。私の求めに応じて、これほどまでに作り上げてくださったこと、千の感謝を申し上げます。お暇なときに、同じようにこの素晴らしい作品をお続けになるようお願いします。

オックスフォードの主教さまがおっしゃるには、あなたの翻訳はとてもよいものだということです。何か瑕疵があるとしても、それはただ綿密さが足りずに、流麗すぎる様式で書かれたからなのです、と。エピクテートスは気取らない男で、飾り気なく話します。これを表せるはずの翻訳というものは、主教さまのお考えでは、原典の精神をもっと残し、その観念をもっと正確に与えるものだろうと。あなたの小包を手にした翌日、主教さまは自分の真意を説明するために、同封しました急ぎの翻訳おふたつを書き下ろしました。主教さまの言うべきことはこれだけで、あとはただ、あなたにたいへんうってつけの仕事をお続けになるよう強くお望みだということで、そのことについては私も確かに賢明なことだと存じます。もし、あなたが今やめてしまうなら、この論評が具合悪くお取りになったのだという思いに傾かざるを得ませんが、もちろん私がどれだけこの見本に感心しているかをおわかりになれば、あなたはきっともっと私を楽しませてくれるものと思います、ただし打ち込むことがあなたに支障なく、もっとお好みのやり方でなされることのお邪魔にならないのならばの話ですが。お比べになったなら、あなたの翻訳と閣下のものを私に返して下さるのがよからうと存じます。

書簡⑤ カーター女史からトールボット嬢へ 日付不明[M]

私によろしく下さいましたエピクテートスについてのご教授について、閣下に心からの感謝をお返しします。お守りする心づもりでおります。まだ何も進めてはおりません。と申しますのも、お送りしたものは、みじめなくらいひどく訳したものだ本当に思っておりまして、そのためにこれ以上やってみようという気持ちがないのです。文飾への情熱の弁護になるような、拙いエピクテートスを引き寄せて自分を助けてくれるような、大事なものがあるとはっきりわかっているのですが、とはいえ、私の頭は本当に混乱してしまって、言いたいことも言えないのです。

書簡⑥ トールボット嬢からカーター女史へ 日付不明[M]

閣下は、文飾の擁護のためにあなたが言わんとすることをみな聞きたいとお望みです。ですが、あなたが閣下に、エピクテートスがレースの外衣を着ていることを証明できない限り、あの方は着飾らせることをあなたにお許しにならないでしょう。おそらくあなたもあの写しを受け入れて下さるでしょうから、どうか引き続き翻訳なさいな。

[追伸：主教の筆跡で] 余にも一言言わせてほしい。どうしてあなたは、飾り気なく気取らずに人をはっとさせる説教師を、誰からも気にかけてもらえなそうな流麗優雅な書き手へと変えようと言うのです？ そのことにお返事ください、親愛なるカーター嬢よ。

書簡⑦ カーター女史からオックスフォード主教トマス・セッカーへ 日付不明[M]

きっとお認めくださると思いますが、閣下、『提要』はただ飾り気なく誰にでもわかるものです。ですが、アッリアーノス [実は注釈者でなく筆者] の注釈はそこまで平易ではないの

ではないでしょうか？ 筋道のために得てして、読者の大半が気にする以上に細かすぎる配慮を求めてしまいますし、あちらこちらで脈略や一貫性すらなくなっているように思えます。だからこそ、そのような書物はむしろ釈語して言い尽くすように訳すことが必要なのではないでしょうか？ 様式について言えば、著者自身が夢にも思っていない修辞や比喩は確かに採り入れられるべきではありません。しかし、もし意味が保たれるなら、対話をするようになった相手にとって自然かつ落ち着けるものになるような言葉を話させるようつとめることも、むしろ真つ当なのではないでしょうか？ わからない者たちにとってはぎこちなく無様に見えるような本人の国の特殊な様式をそのままにしてしまうよりは。さらに、推薦してくれる聖職の権威もないような道徳の書籍は、外からの助けが少しもないとおすすめるのが難しくなるのです。〔この書簡に対しては、さらに原文の性質を守るよう頑迷に指摘・反論する主教からの長文の返事が残っているが、1749年9月13日の日付がついているため、このやりとりはその前後のことかと思われる〕

書簡⑧ トールボット嬢からカーター女史へ 日付不明[M]

力強さ・簡潔さ・飾り気のなさについての閣下のお考えには(私にも感じ入らせる事々の筆致から判断する限り)私もたいへん賛成です。このように高尚かつ有用な愉しみを私に与えてくださったあなたの優しさに、千の感謝をお返しします。打ち込むことがあなたにとっておつらく不都合でない限りは、どうか続けてくださるようこの上なく願っております。とはいえいづれにしましても、あなたに不愉快なつとめを押しついたり、日中の頭痛の種になったりするよりも、自分でギリシア語やアラビア語、ホットtentott語などを学んだ方がいいのかもしれない。

書簡⑨ カーター女史からトールボット嬢へ 日付不明[M]

私の頭のことをお気に病む必要はありませんよ。と申しますのも、全体的にすっかりよくなりましたし、エピクテートスについても何か気を害したりはしておりません。ちょっとした見本を、楽しみだとおっしゃるくらいありがたく思っているのですから、不快になど感じようはずもございません。ひどく無様にやってしまったことについて、自分自身が腹立たしくてならないだけなのです。とはいえ、閣下がよろしくくださった素晴らしいご教示をもとにいくらか改善できないかとは思っています。

書簡⑩ トールボット嬢からカーター女史へ 1749年11月4日 ピカデリー[L][M]

親愛なるカーター嬢、あなたのお手紙の日付もずいぶん昔になってしまったと気づいて恥ずかしく思っておりますが、さまざまな理由のために失礼をしておりました。[…]

さて、あなたが私のために頑張ってくださった優しくもありがたい努力について、お話しすべき頃合いとなりました。日に日に私はエピクテートスについてますます感心しておりまして、先日のコウノトリの巢の章が際立っていました。その著しい率直さには気品があります。考え

の素晴らしさ、表現の簡潔さのために、母も私ももっと読みたくなりました。ひたすらあなたへ正直に申し上げますが、あなたの原稿を私たちで書き写してささやかな本に仕立てまして、ですから再度お送り頂く必要はありません。私が、あなたの優しさの半分にでも値していればいいのですが——ともあれ、イチジクの木も何かの役に立てるだけ育つには時間がかかるというものです。私からお願いできるのは、私たちのために執筆して頭痛を起こされないように、ということだけなのです。

[この書簡は[L]と[M]のあいだで異同あり、[L]に拠る]

書簡⑪ トールボット嬢からカーター女史へ 1749年12月5日[M]

親愛なるカーター嬢、なるほど一ヶ所だけは間違いがありますが、このたびのあなたのエピクテートの小包は、これまで頂いたものよりも私はたいへん気に入っております。難しいところがないわけではありませんが、考え込まなければならぬくらい難しいところは少しだけで、考えればわかるようになりますから、そういうところは迫力がなく言葉数が多くても明白な方がきっとどこまでもいいのですね。なんという表現の力・躍動感・迫真性・簡潔性でしょうか！ なんという情感の素晴らしさ！ 理性や良識はなんと気高く重々しいことでしょうか！ この正直で率直な老人は私に、なんという素晴らしい説教と教訓を与えてくれるのでしょうか！(送ってくださったことをあなたに千回感謝申し上げます)付き合いで退屈な謙遜を聞いて、わけもなく脈絡なくどうかしたいと思ったり、いらいらと不満に襲われたりするときにはいつでも、どうも私の耳に彼の声が響いてきそうです——「でもあなたはみじめで不満な気持ちになっている。ならば楽しい気持ちになって、何もかも最高にすればいい。社交を娯楽や祭と呼んでしまえ」[『談話集』1・12・2:1文目はのちの訳文と同じだが後半は省略異同を含む]——敬愛なるエピクテートよ、あなたが正しい。社交では、私たちも心を何でも朗らかで愛想よく優しい情緒に開くべきなのです。祝祭のときとなれば私たちのやりとりもお互い気持ちよくできる。何という考えでしょう。私にとってのロンドンを明るく照らしてくれることでしょうか！ 私はもう文句を言いません——隠れてひとりため息をついてみたりもしません、心の騒乱・混沌・混乱・空虚・苦悶だなんて。その代わりこれから自分の心を社会的で我慢強く致します。

閣下は、あなたのなされたものを大いなる賛意とともにお読みでしたよ。ですから続けることをどうか思いとどまることのなきよう。と申しますのも、あなたは素晴らしくおやりですし、私たちみなにたいへんな喜びをくださっているのですから。[…]

書簡⑫ カーター女史からトールボット嬢へ 1749年12月16日[M]

親愛なるトールボット嬢、私がどんなにみじめにエピクテートをながめたか、エピクテートがどんなにあわれに私を見つめたか、言葉にしようありません。閣下が私の文飾について無慈悲におっしゃったお便りを目にしました。とはいえ、私たちの熟慮した方針の結果とし

て、私たちは不器用ながらも穏やかに続けていくことを決めたのです。私がわからないあいだはまだ訳されている途中なのです。そして誰もわかってくれないあいだは、私もまだ訳している途中だということなのです。

書簡⑬ カーター女史からトルボット嬢へ 1750年12月1日 ディール[L]

親愛なるトルボット嬢、私は少しピンダロスを読みました […]

エピクテートをさらにもう二章訳し終わりましたので、あなたの「社会道徳」への解毒剤の一種としてあなたにお送りしますね。[…]

書簡⑭ カーター女史からトルボット嬢へ 1751年5月21日 ディール[L]

[…]

たくさんエピクテートスをお送りしますね。でも送れる原稿はもっとあるのですよ。エディンバラに滞在されるとおっしゃっていた閣下は、この翻訳について小耳に挟んだりしていらっしやいますか？ 私はあなたに、もっといい衣装を着たエピクテートスを見てほしいと思っていますから、私のみっともない変装よりももっと引き立つように見えるのいいのですが。去年幸いお目にかかれたときに、あなたがよろしくしてくださったお約束をお忘れないように、と言ってもいいですよ。

書簡⑮ カーター女史からトルボット嬢へ 1752年12月[M]

今ちょうど翻訳が終わりましたから、まもなく清書を始めるつもりですが、あなたが最良だとお考えのように、閣下が第四書をよろしく手直しして下さるのを待ってもよさそうです。

書簡⑯ トルボット嬢からカーター女史へ 1753年9月[M]

オックスフォード主教はあなたのために鋭意作業中でいらっしやいます。どうか速やかにハリス氏の質問状を寄こしてくださいませよう。この主な件が終わりましたら、私も浅学の読者のため序文のようなものを考えるべき頃合にちょうどなろうかと存じます。エピクテートの生涯・人柄やストア派哲学のあらましについてできるだけうまく説明して頂いて、その中か註でしたら、何が誤りで的外れで欠陥なのか指摘した上で、唯一真正の思想キリスト教との比較ができるいい機会が得られましょう。

書簡⑰ カーター女史からトルボット嬢へ 日付不明[M]

エピクテートス等々、無事到着しました。彼と私は、閣下らご高覧いただいた紳士の皆様にたいへん感謝しております。できるだけすぐみなさんのご指摘やあなたの助言をお役立てるつもりでしたが、思ったより早くはできなそうです。この夏まるまる使って翻訳を読み直そうと思っておりましたが、取りかかろうにもいつものあれこれであまりに何度か妨げられてしまいま

して [...]

ともあれこれでこの企画も公けになりました。ですからこの拙い愚訳も、もう気楽に世間に隠れてこそそはできず、たとえ世に出て誰にも読まれぬのだとしても、じきに全容が露わになって当惑されながら見つめられてしまうのでしょうか。世にそれなりに穴があるのなら、私は自分のみすぼらしい頭をつつこんでしまいたいです、あわれなエピクテトスがどうなるにせよ。

書簡⑱ カーター女史からトールボット嬢へ 1755年1月11日 デイール[L]

[...] ついにエピクテトスが仕上がりました。とはいえ望んでいたほど瑕疵や行間挿入から免かれなかったのですが、3週間ほどのちにお送りする機会があろうかと存じます。そのあいだに、あなたが納得されそうなストア派哲学のささやかな解説をやってみようと思います。私のみすぼらしい頭でも許されそうならの話ですが。

書簡⑲ トールボット嬢からカーター女史へ 1755年2月7日 セント・ポールズ[L]

[...] ここだけの話ちょっと思いついたのですが、どなたかにエピクテトスとアツリアーノス両人が何かしら記録された数少ない文献を全部集めてもらって、その生涯と人柄を短い説明にまとめてもらうのがよろしいかと存じます。その誰かがあなたはどうかと言いたいわけではありませんよ。

書簡⑳ カーター女史からトールボット嬢へ 1755年3月5日 デイール[L]

エピクテトスの生涯を書く人が誰であれ、私は十数枚も肌着をつくる役がありますから、あえて言いますがトールボット嬢、それは私ではありえませんよ。ともあれ私も真面目にそのことを考えましたが、その主題に適うような仔細はほんの少ししか残っておりませんし、よく知る人もたいへん少ないので、私には不要なことと思われました。 [...]

書簡㉑ カーター女史からトマス・セッカーへ 1755年 日付不明(夏~秋ごろ)[M]

閣下は、この翻訳が害をなすのではというご意見をお持ちのようですが、私はそのことをいささか不安に恐ろしく思わざるを得ません。ただ翻訳できつく規制してしまうと、エピクテトスが、閣下がおっしゃる不幸な人々にとって益になることがおそらくほとんどなくなってしまいます。だからといって、ちっとも害を及ぼさないとみんなで強く確信できるギリシア語のなかに埋もれさせておく方がいいわけなのでしょう？ なるほど、この本そのものは役に立たずとも、少なくともこの本の助けを必要とする人々には役に立つのだという意見を私は常に持っております。ともあれこの本が誰かの害になるなどということは、私の想定のうちには入っておりません。

書簡② カーター女史からトールボット嬢へ 1755年 日付不明(夏～秋ごろ)[M]

親愛なるトールボット嬢、エピクテートの話題について何かしらお話してもよろしいでしょうか？ いくつかの例では、あなた以上に私は彼の好ましい意見を愉しませずにはいられないのですが、オックスフォードの主教とあなたは、害をなすおそれがあるかもしれないとお考えのようなので、私は不安と疑念でいっぱいです。なるほどあなたは、適切な註と熟慮の上での意見がついていれば、翻訳は優れた作品になるとおっしゃいます。しかし解毒剤の効力を試すために毒を処理するのは、きっと危険な実験です。私の考えとしては、倫理を厳格に求めて、現代の紳士なら単なるたわ言と考えるような当世風の悪徳をもとがめ、宗教への理解も深く示しているようなこの著者が、悪人たちに勉強されるとは少しも思えないのです。もしされたとしても、結果としてはただ、何も得られないと確信するばかりです。もっとも、彼らのような転向異教徒にとっては数えきれないほどのものが失われるでしょうに。今のところ、私はどう考えてよいかわかりません。オックスフォード主教とあなたがきっと、私のために考えてくださると期待しております。

[…]

書簡③ カーター女史からトールボット嬢へ 1756年5月3日 ディール[L]

ただいま私はつとめを終わらせるためにできる発送のすべてを起こっているところで、というのも、まもなくロンドンへ安全な手でそれを送る安全な機会が得られそうだからです。エピクテートと私はあまりに長くつきあいましたので、彼を旅という危険な道にさらすことについて一抹の悲しみを覚えておりますし、私には彼を案じるいまだ強い理由があるのです。ですから彼をセント・ポールズの司祭公邸に無事にお預けできればたいへん嬉しく思います。そこでならいつでもあなたの言うことも聞けますし、そのめぐり合わせの対応もあなたから受けられましょう。エピクテートをセント・ポールズに、[弟] ハリーを大学に送って、15枚の肌着も終われば、私は望み通りこの夏の残りは、自由にめいっぱい楽しくたらだらし、好きな本をいくらかでも読み、丘や谷を思うまま駆け回って、自分を慰めることとします。

優れた註釈をありがとうございました。ひとつを除いて、私自身が書き起こしました。[…]

書簡④ 父からカーター女史へ 1757年3月22日 ディール[M]

エピクテートが英語という衣を着て現れることになったこと、私はたいへん嬉しく思います。むろん、あなたの名前も表に出されることとなりましょう。なぜならそれが、きっと予約者にとって惹きつけられる最大の要因になるからです。本件全体のとりまとめは、おそらくあなたも閣下[オックスフォード主教]のお世話になるでしょう。どうか私にも[予約出版の]趣意書を送ってください。というのも、私もできる限りの支援をあなたにしたいと考えています。まったく正当なこととして、あなたは自分の頑張りに対してそれなりの利益を得るべきなのです。あなたの予約募集の後押しをしたからといって、おこぼれに預りたいわけではありま

せん。私にせよ他の者にせよ、あなたを心から応援しようという良識ある者は、誰もそんな考えは抱いていません。あなたという人間・人柄をわかっているからこそ、あなたが当然の報酬を得ることが最重要と考えるのです。だから、それこそが予約の誘因となり、その予約が自分の喜びにつながるというわけです。

書簡②⑤ カーター女史からトールボット嬢へ 日付不明(印刷中か)[M]

二版もまちがいなく、控えめに言っても必要だろうと思われ、閣下とあなたがおっしゃるように、初版はみなおそらく道徳・ギリシア学の推進者やアイルランドの主教たちのほか二大大学が受け取ることになりそうだという励みになるお話からすると。オックスフォード主教がそのことを入れ知恵してくださなければ、私もそこまで図々しくなれなかったでしょう。とはいえこの件には少々心の痛みを感じております。エピクテートスには、大学人たちには無視されながら、貴婦人たちの間では丁重におもてなしされて自らを慰さめるような存在であってほしいからです。

そういえばひと財産をお持ちのある若い男性のことはまだあなたにお話ししていなかったと思います。この方は(まもなく大学をお出になる方で)人に予約をすすめられたのにお断りになって、その本が女性の役に立つ家政についての書籍なら予約してあげたのに、とおっしゃったんです。これが名士の若様でしょうか？ なら今風のゆでだんご作りにうってつけの調理法をおすすめしてはよろしくて？ どうにも良すぎる趣味をお持ちのようですから、オックスフォードだと古代人の汁物や調味料では堕落おできにならないみたいですし。

[訳者解題]

1 底本テキストについて

現時点では、エリザベス・カーターの各種書簡に関する包括的な校訂版は存在していない。そのため、本稿では19世紀に刊行された版本のファクシミリ版に拠った。

ひとつは、エリザベス・カーターとキャサリン・トールボットのあいだで交わされた書簡をまとめたという以下の四巻本である。

E. Carter. (1809/1975). *A Series of Letters between Mrs. Elizabeth Carter and Miss Catherine Talbot from the Year 1741 to 1770*. 4 vols. New York: AMS Press.

もうひとつは、上記書簡集の原本を所持していたとされる親族で遺産相続人だった伝記作家・編集者のモンタギュー・ペニンントン(Montagu Pennington, 1762-1849)が執筆したカーターの伝記である。

M. Pennington. [ed.] (1825/1974). *Memoirs of the Life of Mrs. Elizabeth Carter*. 4th ed. 2 vols. New York: AMS Press.

後者には、前者には含まれていない手紙も多数、抜粋のかたちで収録されており、訳出にあたっては両者から適宜取捨選択した。書簡集からのものは[L]、伝記の pp.163-213 を出典とするものには[M]の符号を付してある。

また、[M]からいくつかの手紙を採録した以下のアンソロジーも参考にした。

D. Robinson. [ed.] (2002). *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*. 2nd ed. Manchester: St. Jerome.

さらに、1755年の書簡②についてだけは近年の校訂版があるので、そちらを大いに参考にした。収録された書籍の情報は以下の通りである。

J. Hawley. [ed.] (1999). *Bluestocking Feminism: Writings of the Bluestocking Circle, 1738-1785. Volume 2: Elizabeth Carter*. London: Pickering.

そのほか、[M]の初版復刻版である次の書籍も実見した。

M. Pennington. [ed.] (1807/2011). *Memoirs of the Life of Mrs. Elizabeth Carter*. 1st ed. Cambridge: Cambridge University Press.

2 原著者および背景・内容について

古代ギリシアのストア派哲学者エピクテートの著作集を完訳出版することになるエリザベス・カーターは、ドーヴァーから北北東へ14キロにあるケント州のディール(Deal)という港町の出身で、1717年12月16日に、当地の礼拝堂の終身牧師補の家の長女として生まれた。この聖職者の父は説教が上手く語学に堪能で、自分の子どもたちにも家庭教育として等しく古典語教育を施した。根を詰める少女であったカーターも熱心に勉強し、ラテンやギリシアの古典語のみならず、独習も含めてフランス語・イタリア語・ドイツ語・スペイン語のほか、ヘブライ語まで学んだという。その語学力は、のちサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-1784)が絶賛するほどだった。

父のツテで16歳のときに『紳士ノ雑誌』(*Gentleman's Magazine*)に自作の詩が掲載されて話題になったため、1735年から39年にかけて冬が来るたびにロンドンへと出かけ、そこでジョンソンを含む文人・学者たちと交流をしている。この時期、カーターは断続的に自作詩や古典の訳詩を雑誌に寄稿したほか、38年3月以降は父親の方針で、居候しつつロンドンで自律独立した生活を送るようになった。出版者やその周囲は、機知のみならず学識ある女性であるカーターを、ミネルヴァやヒュパティアになぞらえて讃えたり、郊外にあるアレグザンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の邸宅へ連れていき彼の正統後継者として売り出そうとするなどした。また38年には薄いながらも詩集を出版しており、その年末にはフランス語、翌39年5月にはイタリア語からの翻訳書も刊行し、とりわけ後者は、フォントネル『新世界発見』(英訳アラ・ベーン、1688年)にならって、ニュートンの色と光の理論を女性向けに解説するという哲学者と婦人の対話篇で、女子教育の向上を意識していた学者志向である本人の希望通り、首都で

華やかに若き才を発揮していた。

しかし先輩文士のつきまといや求婚など恋愛関係のもつれと、持病の知恵熱や頭痛の悪化があって、最終的には父から自分の人生は自分で考え判断するように促されて未婚を決心し、39年の6月にはロンドンをいったん離れることにする。続く40年代・50年代には生地のディールを中心にして、時には少女時代に家事の修養で訪れたカンタベリーにもその健脚で赴きつつ家庭では弟に大学入学準備の教育をほどこしながら、(それでも求婚者は絶えなかったらしいが)ごく限られた交友関係のなかで手紙をやりとりしたり会合したり観劇したりする静かな(ある意味ではストア派らしい)生活が続けることになる。このときの交流の中心となる相手が、キャサリン・トールボットだった。

親友キャサリン・トールボットはカーターよりも年少の1721年5月21日の生まれで、実父はトールボットの生まれる前に天然痘で若くして亡くなっているが、トールボット家は有力な聖職者の家系だったからか、その父の知人であったトマス・セッカー(Thomas Secker, 1693-1768)のところで母娘ともに世話になっている。子どものいなかったセッカー家のなかば養子として育てられ、交流のあったころは、当時セッカーがオックスフォードの主教であった関係で、夏はオックスフォード近くのカズドン(Cuddesdon)にある主教の屋敷に住まい、冬はロンドンのセント・ポール大聖堂の司祭公邸にいたという。

同じく家庭で高い教養教育を受けたトールボットは、共通の知人であった学者を通じて41年2月ロンドンでカーターと知り合うが、明るく軽妙なトールボットと現実的で控えめなカーターの性格がうまくかみ合ったようだ。年少だったトールボットが40年代からロンドンで文芸を含む活動をし始めたこともあって、しばらく彼女がカーターと都会の文芸文化をつなぎとめる役割を果たした。出会いのあと数年は都合が合わず顔を合わせられなかったが、ちょうど二人がロンドンにいた48年11月から49年4月にかけては頻繁に会っていたらしい。そのときトールボットがエピクテートス翻訳をカーターに持ちかけ、直前に居候先の夫人をなくしていたトールボットにとっての慰めになればとカーターも引き受けたと推測されているが(Myers, 160)、書簡に残っているのはカーターがディールに戻ったのちのやりとりである。ゆっくりながらも翻訳とその意見交換が進められ、時には保守的な保護者(セッカー)と意見を戦わせつつ、その訳稿は練り上げられていったと思われる。

50年代はカーターも再びロンドンをたびたび訪れたが、カーターは結婚のすすめや家庭教師の誘いもやはり固辞し、その代わり完成していた訳稿の出版を53年春ごろに決意したようだ。ただし書籍として出版するにはエピクテートスの解説なども必要である上に、予約出版の出資者を募らなければいけなかったため、刊行までには相当の時間がかかることになった。結果1,031件集まり、印刷は57年6月から58年4月までおよそ1年かかってそれでも足りず増刷し、500頁をこえる四折1巻本がついに完成した。

初期の書簡中ではセッカーに文飾をたしなめられ、それでも書簡⑫で意思を貫いているため、潤色された訳文を想像しがちだが、実際に刊行されたものはむしろ過剰な付加などほとんどな

い平易で読みやすい訳である。これはセッカーの意見を受け入れたというよりは、当時の学者・専門家の主張する一語一句そのままに原文の訳用・文形にこだわる逐語訳主義からすれば、英語の自然な慣用や語法に合わせる程度の変更・補足でも、華美な文飾と捉えられたということでもある。事実、翻訳序文でもカーターはあくまで原文の精神や専門用語を伝えるべきところでは逐字訳としたが、そうでない部分では多少のゆとりある訳が痛痒なく許されるだろうと述べている。そこがセッカーとの妥協点だったのだろう。

書簡後期で触れられた害への懸念というのは序文につけられた解説や書簡の他の箇所を読むかぎり、エピクテートス思想にある異教徒のことと考えられる。永遠の死を認めない唯物論性や男色・自殺の容認などは、やはりキリスト教からすれば抵抗があるのだろう。しかしカーターが重視するのは、かつて中世では修道院でも用いられたというほどのエピクテートスの徹底した実践倫理である。ままたらぬ現実の苦しみ・つらさに惑わされず乱されず、耐えて心を平静にした上で、自らの精神の自主独立を得る。こうした自律心の強調は、カーター自身の気質に合うものであるし、そのほかエピクテートスにある徳性や神のロゴスを大切とする考え方は、序文でも共通点として指摘されている(実際、後期ストア哲学と初期キリスト教には相互に影響があったとも言われている)。だからこそ、つらい人生を歩む(訳し始めたころのトルボットやカーターのような)人々にとっては役に立つのだと主張しようとしたのだろう。

エピクテートス初の英語完訳となる『エピクテートス現存全著作集』は1758年に刊行され、書評でも女性への平等な教育が促されるほどの強い感銘を与えたばかりかヨーロッパでも評判となり、さらにかかなりの収入をもたらした。そのおかげでカーターは金銭的にも親から独立でき、地元ディールに海の見える家が買えた上にロンドンに下宿を借りられたのみならず、その名声からエリザベス・モンタギュー(Elizabeth Montagu, 1718-1800)主宰の青鞥派サロンにも招かれて、60年代には再び文芸と社交の世界に復帰することとなった。この青鞥派から求められて、1762年には再度の自作詩集も刊行している。

カーターが安らかに亡くなったのは1806年2月19日、ロンドンでの下宿でのことだった。そのエピクテートス翻訳は死後も版を重ね、エヴリマン叢書に入ってからには現代の普及版としての役割を長く果たし、今にもその令名が伝わることとなるのである。

主要参考文献

- Agorni, M. (2002/2014). *Translating Italy for the Eighteenth Century: Women, Translation, and Travel Writing 1739-1797*. New York: Routledge.
- Anonymous. (1814). "Biographical Sketch of Elizabeth Carter". *The Belfast Monthly Magazine*, 12 (66): 27-35.
- Brant, C. (2006). *Eighteenth-Century Letters and British Culture*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Brown, S. A. (2005). "Women Translators". S. Gillespie and D. Hopkins [eds.] *The Oxford History of Literary Translation in English: Volume 3, 1660-1790*. Oxford: Oxford University Press, pp.111-120.
- Carter, E. (1809/1975). *A Series of Letters between Mrs. Elizabeth Carter and Miss Catherine Talbot from the Year 1741 to 1770*. 4 vols. New York: AMS Press.

- Eger, E. and L. Peltz. (2008). *Brilliant Women: 18th-Century Bluestockings*. London: National Portrait Gallery.
- (2010). *Bluestockings: Women of Reason from Enlightenment to Romanticism*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Ezell, M. J. M. (1993). *Writing Women's Literary History*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- (1999). *Social Authorship and the Advent of Print*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- (2003). "By a Lady': The Mask of the Feminine in Restoration, Early Eighteenth-Century Print Culture". R. J. Griffin [ed.] *The Faces of Anonymity: Anonymous and Pseudonymous Publication from the Sixteenth to the Twentieth Century*. New York: Palgrave Macmillan, pp.63-79.
- Gaussen, A. C. C. (1906). *A Woman of Wit and Wisdom: A Memoir of Elizabeth Carter, One of the 'Bas Bleu' Society, (1717-1806)*. London: Smith.
- Gillespie, S. (2011). *English Translation and Classical Reception: Towards a New Literary History*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Hampshire, G. (2005). *Elizabeth Carter, 1717-1806: An Edition of Some Unpublished Letters*. Newark: University of Delaware Press.
- Hawley, J. [ed.] (1999). *Bluestocking Feminism: Writings of the Bluestocking Circle, 1738-1785. Volume 2: Elizabeth Carter*. London: Pickering.
- (2004). "Carter, Elizabeth". *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 10. Oxford: Oxford University Press, pp.340-345.
- Hayes, J. C. (2009). *Translation, Subjectivity, and Culture in France and England, 1600-1800*. Stanford: Stanford University Press.
- Hurley, A. E. (2006). "A Conversation of Their Own: Watering-Place Correspondence among the Bluestockings". *Eighteenth-Century Studies*, 40(1): 1-21.
- Johns, A. (2014). *Bluestocking Feminism and British-German Cultural Transfer, 1750-1837*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Lanser, S. S. (1998). "Befriending the Body: Female Intimacies as Class Acts". *Eighteenth-Century Studies*, 32(2): 179-198.
- Myers, S. H. (1990). *The Bluestocking Circle: Women, Friendship, and the Life of the Mind in Eighteenth-Century England*. Oxford: Clarendon Press.
- Pennington, M. [ed.] (1807/2011). *Memoirs of the Life of Mrs. Elizabeth Carter*. 1st ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1825/1974). *Memoirs of the Life of Mrs. Elizabeth Carter*. 4th ed. 2 vols. New York: AMS Press.
- Robinson, C. S. (2009). A Critical Edition of Elizabeth Carter's Life and Work. Doctoral Thesis at Arizona State University.
- Robinson, D. [ed.] (2002). *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*. 2nd ed. Manchester: St. Jerome.
- Spencer, J. (1986). *The Rise of the Woman Novelist: From Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell.
- Stevenson, J. (2005). *Women Latin Poets: Language, Gender and Authority from Antiquity to the Eighteenth Century*. Oxford: Oxford University Press.
- Suzuki, M. (2002). "Mentors' Help and Leaned Women". *Shizuoka University Jinbun Ronshu*, 52(2): 135-156.
- Thomas, C. (1991). "'Th' Instructive Moral and Important Thought': Elizabeth Carter Reads Pope, Johnson, and Epictetus". *The Age of Johnson*, 4: 137-169.

- Todd, J. [ed.] (1989). *British Women Writers: A Critical Reference Guide*. New York: Continuum.
- Winnifirth, T. (2005). "Moralists, Orators, and Literary Critics". S. Gillespie and D. Hopkins [eds.] *The Oxford History of Literary Translation in English: Volume 3, 1660-1790*. Oxford: Oxford University Press, pp.253-271.
- Zuk, R. (2004). "Talbot, Catherine". *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 53. Oxford: Oxford University Press, pp.673-675.